Ⅲ　京内寺院の調査

1　薬師寺中門の調査

薬師寺中門跡の調査は、1954年に浅野清氏をはじめとする諸先学によって部分的な調査が行われたが、このたび中門の建物復原に際し、全面的な調査を行うこととなった。発掘区の面積は、中門全域と南面東回廊の一部を含む計670㎡。

中門の遺構

建物・基壇規模　中門の遺構面は、遺存の良好な箇所で現地表下約45㎝にあり、平均約50㎝の基壇土が遺存していた。礎石はすべて抜き取られているが、各々の礎石抜取穴の中に数個の根石を検出した。

これらの礎石抜取穴から明らかとなった中門の建物規模は東西24ｍ（81尺）南北7.4ｍ（25尺）で、桁行5間、梁行2間に復原できる。柱間寸尺は、桁行中央3間が17尺等間、両端間が15尺等間、梁行が12.5尺等間である。この寸法は、1954年の調査によって得た成果と一致し、長和4（1015）年に製作された『薬師寺縁起』（以下『縁起』と略す。）の記載寸尺のうち、桁行寸尺「長五丈一尺」と相異することを再度確認した。

基壇は西端の礎石抜取穴以西が現代の池によって大幅な撹乱をうけているうえに、後述するように外装の凝灰岩も圧倒的に後補のものが多い。しかし、その平面規模は東西27.53ｍ（93尺）、南北13.32ｍ（45尺）に復原できる。従って、建物規模を考慮するならば、基壇の出は平方向が10尺、妻方向が6尺となる。

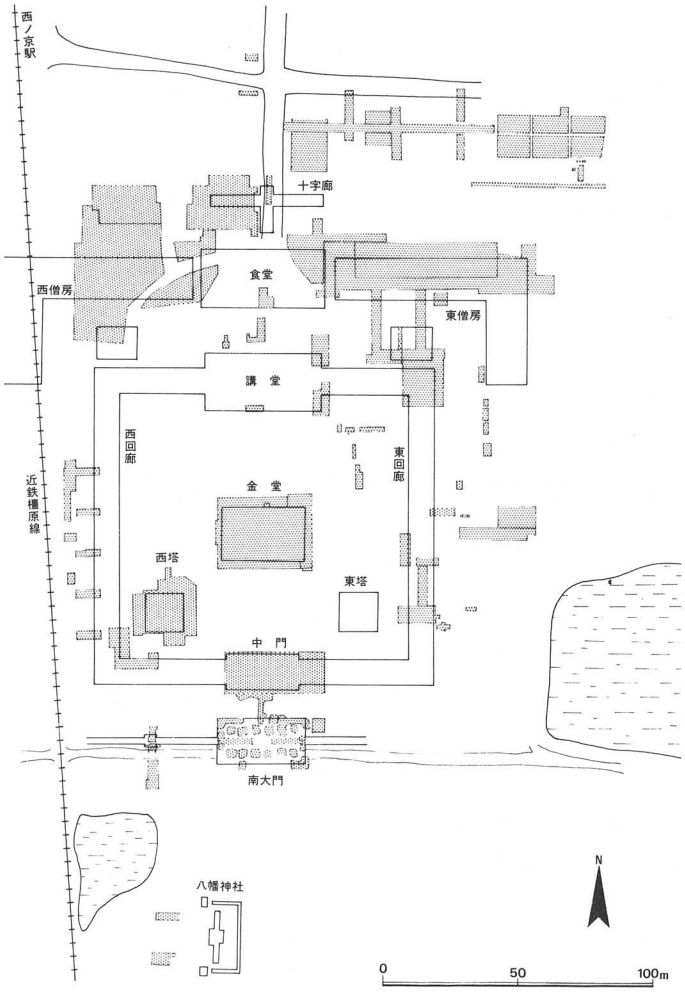
また、平面規模の確認に加えて、今回は断割調査によって基壇の築成状況を把握した。その結果、基壇は全域に及ぶ掘込地業を行わず、整地した地表面の直上にやや不規則な版築工法によって築成していることが判明した。とりわけ築成途上で、礎石据え付け位置にあたる部分を広範囲にわたって掘削し、ここに大量の瓦で根がためを行っている。同時にこれらの工程に、明確な修復の痕跡は認められない。従って、今回の調査で確認した建物及び基壇規模が創建当初を伝えるも

のと考えて、ほぼ大過ないであろう。

基壇外装　基壇回わりの凝灰岩化粧は、北面では一部遺存するのみであるが、南面では比較的残りが良好である。しかし、それらの大半は規格、積み方がともに不揃いで、後補のものである可能性が高い。とりわけ基壇東南隅部の凝灰岩は、転用材であるうえに裏込めには焼土を混じており、『縁起』に記す天禄4（973）年の火災焼失後、再建時に積みかえたものと考えられる。唯一創建当初の基壇化粧として、南面の東から2間目に4個の凝灰岩列を検出した。この裏込めは均一な黄灰砂質土で、焼土などの混入も認められない。またこれらの凝灰岩の上面には、風化してはいるものの、縦6cm、横6cmの面とりが認められ、地覆石と羽目石とが一石の造り出しであったことを示している。

石階　石階の痕跡として、中門の中央3間の南面に長さ5mにわたって、幅約27cm、厚さ5cmの板状の凝灰岩列を検出した。これは先述の創建当初の地覆石列に対応し、創建時の石階第1段目の踏石の底部が遺存したものと考えられる。これによって石階は踏面が27cm、蹴上げが21cmの4段に復原し得る。従って基壇の高さはおよそ80cmとなる。

この石階の南には、石階の東西幅員に呼応して、薄い凝灰岩の敷石遺構が存在



第43図　中門・回廊発掘位置図

する。遺存状況はかなり不良で、南大門から中門にかけての舗装敷石の底部が遺存したものであろう。

また、中門の中央間に相当する部分で、基壇に対して南折して存在する縦10cm、横15cm、長約50cmの1対の凝灰石を検出した。この2つの石は、位置及び形状から石階の耳石の残闕とも考えられるが、創建当初の石階第1段目踏石より更に高い位置に存在する。従って当初中央3間であった石階を、後に中央1間に縮少している可能性がある。

台石・台座　中門の前面両端間のほぼ中央部で、礎石様の花崗岩2対を基壇土に覆われた状態で検出した。この石は直径80cm、短径70cm、厚さ70cmの上面の平らな不整球形で、上面の中央には、径25cm、深約30cmの枘穴がうがたれている。この4個の枘穴の中からは焼土とともに約200点の塑像の断片が出土した。また同じく中門前面両端間に、この石をL字形にとり囲む幅約90cmの凝灰岩縁石列を検出した。この石列は基底部が部分的に残存し、縁どられた内部に紛末状の凝灰岩が堆積するのみで、遺存状況はそれほど良好ではないが、縁石列の外縁は柱通りよりやや内側に位置し、中門の建物構造とは直接関係のない内部の装飾的施設であろうと考えられる。すなわち『縁起』からは、中門に二王像をはじめ計16躰の仏像が安置されていたことが知られ、この2対の石とL字形の凝灰岩列は、前者が二王像各足の台石、後者がそれ以外の仏像の安置されていた台座と推定される。そして台石の枘穴から出土した焼土と多数の塑像の断片を考慮すれば、『縁起』に記す天禄4（973）年の火災焼失以前の二王像は塑像であった可能性が高いと言える。

雨落溝　中門及び回廊の南面には、雨落溝の遺構と考えられる玉石列及び凝灰岩列が重複し、加えてある時期の洪水を物語る厚い砂層や、天禄4（973）年の火災を示す焼土層が堆積するなど、複雑な様相を呈している。しかし、天禄4年の火災を介して、南面雨落溝は概ね2時期存在することが判明した。

創建当初の姿を復原する遺構は検出できなかったが、地覆石列、石階との関係から考えて、おそらく創建時には南面雨落溝は存在しなかったと考えられる。そ

の後、径30～40㎝の上面の扁平な玉石と板状の凝灰岩で雨落溝を敷設するが、基壇化粧の下層にまで及ぶすり鉢状の厚い砂の堆積層が示すように、ある時期大規模な洪水の影響を受けている。これにより雨落溝は底石を残して破壊され、基壇化粧の大半も倒壊したのであろう。この砂層の直上には厚さ10㎝の焼土層があり、洪水の直後、すなわち天禄4（973）年に中門が火災によって焼失したことを示している。検出した凝灰岩基壇化粧の大半は、この後に積み替えた復興時のものである。

再建後の南面雨落溝は幅約1ｍで、基壇据部を径10～20㎝大の玉石列で補強し、南岸は径30～40㎝大の玉石で護岸している。しかしこの溝は雨落溝としては不相応なほど広く、この地域の基幹排水路の機能もあわせたものと考えられる。

北面雨落溝は、部分的に玉石の抜取痕跡を検出したのみで、大半は素掘り溝として検出した。

また中門北面のやや西寄りの雨落溝北側で径約20㎝大の玉石敷を検出した。1976年の調査でも西塔の基壇四周に同様の玉石敷を検出しており、中門の北面にも帯状の玉石敷舗装がなされていたものと考えられる。

回廊の遺構

建物・基壇規模　南面西回廊は、現代の池ですべて削平されて検出できなかった。南面東回廊は、礎石、礎石抜取穴、及び基壇地覆石列、南北両雨溝等を検出した。

今回検出した遺構から、南面東回廊の建物、基壇規模は、桁行12～13尺、梁行2間、10尺等間の複廊で、基壇の幅員が33尺、従って基壇の出は6.5尺に復原できる。このうち桁行方向の柱間寸尺については、1968年に行った東面回廊の調査で14尺であることが判明しており、今回の調査結果と相異する。また、1969年の調査で明らかとなった南面西回廊の礎石抜取穴と、今回の中門との位置関係からも、やはり14尺で割りつけることは不可能である。それ故、おそらく中門の両脇において柱間寸尺の調整を行ったものと考えられる。

また、回廊基壇は中門基壇に対して勾配をもってとりつくことが判明した。その理由として、まず第一に両者のとりつき部の断面土層観察の結果、両基壇の間

に明確な高低差が認められないこと、第二に回廊の地覆石列が、中門とのとりつき部から回廊の2間目に至る区間で、東に向って1.6％の急勾配で下っていること、等三に中門から数えて2間目の回廊の礎石抜取穴が一様に約50cmの深さをもつのに比して、第1間目の礎石抜取穴が削平をうけて基底部を遺存させるのみであることなどを指摘しうる。同時に南面東回廊西南端の柱位置では、根石とその東の掘形に落しこまれた厚さ65cmの礎石を検出したが、両者を旧状に復原するならば、中門基壇の復原高よりやや低い位置に相当することも、その傍証となる。

なお、この礎石からは回廊の柱の直径を凡そ45cmに復原することが可能である。

基壇化粧　検出した基壇化粧はすべて地覆石列で、凝灰岩が用いられている。全体的に摩滅が著しいが、中門との南面とりつき部においては明確なつくり出しのある地覆石とその前面に転倒した長辺95cm、短辺70cmの羽目石とを検出した。これによって、中門の地覆石と羽目石とが一石から成るのに対し、回廊では別の石材を用いていたことが判明した。これらの基壇化粧は、後述するように洪水や火災の影響を受けて一部欠失したり転倒したりしているが、概ね創建当初の姿を伝えるものである。

雨落溝　北面雨落溝は、最近の撹乱を受けているため明確な痕跡を検出し得なかった。

南面雨落溝の変遷は、ほぼ中門のそれと呼応している。すなわち創建当初存在しなかった南面雨落溝は、天禄4（973）年に相前後して発生した洪水及び火災の教訓を得て玉石列で敷設されていることが判明した。しかし、中門のように創建後、洪水にみまわれるまでの期間に雨落溝の存在する時期があったかどうかは不明である。検出した南面雨落溝の遺構は、粘質土の整地層に敷設された径約30cmの南岸玉石列で、一部欠失している。この整地層の下層には、天禄4（973）年の火災を物語る焼土の堆積があり、その直下には地覆石列下層に及ぶ厚さ40cmの砂の堆積層がある。この砂層によって地覆石列は一部南に転倒しており、中門南面と同様に火災焼失直前に、この付近が大規模な洪水の影響をうけたことを示す。

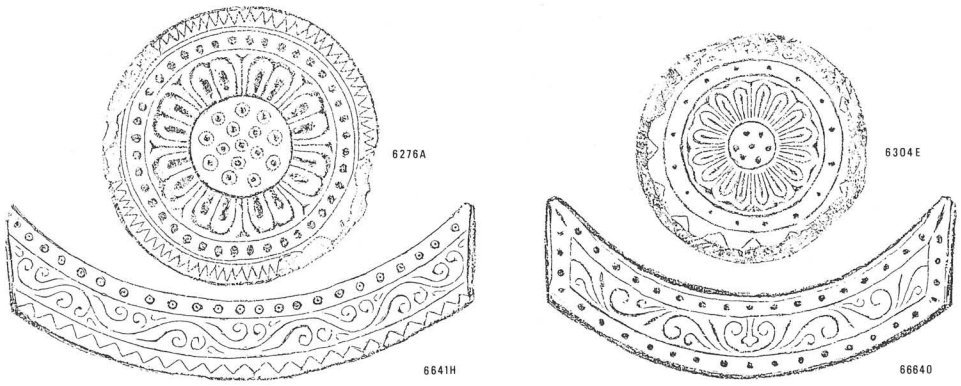
火災後に敷設された雨落溝の上層は、凹凸の激しい厚さ30～50cmの砂で覆わ

れており、再び洪水によって基壇の大半と雨落溝の一部が破壊されたことを示す。その後は基壇は構築されなかったと考えられるが、回廊礎石はなお遺存していたであろう。

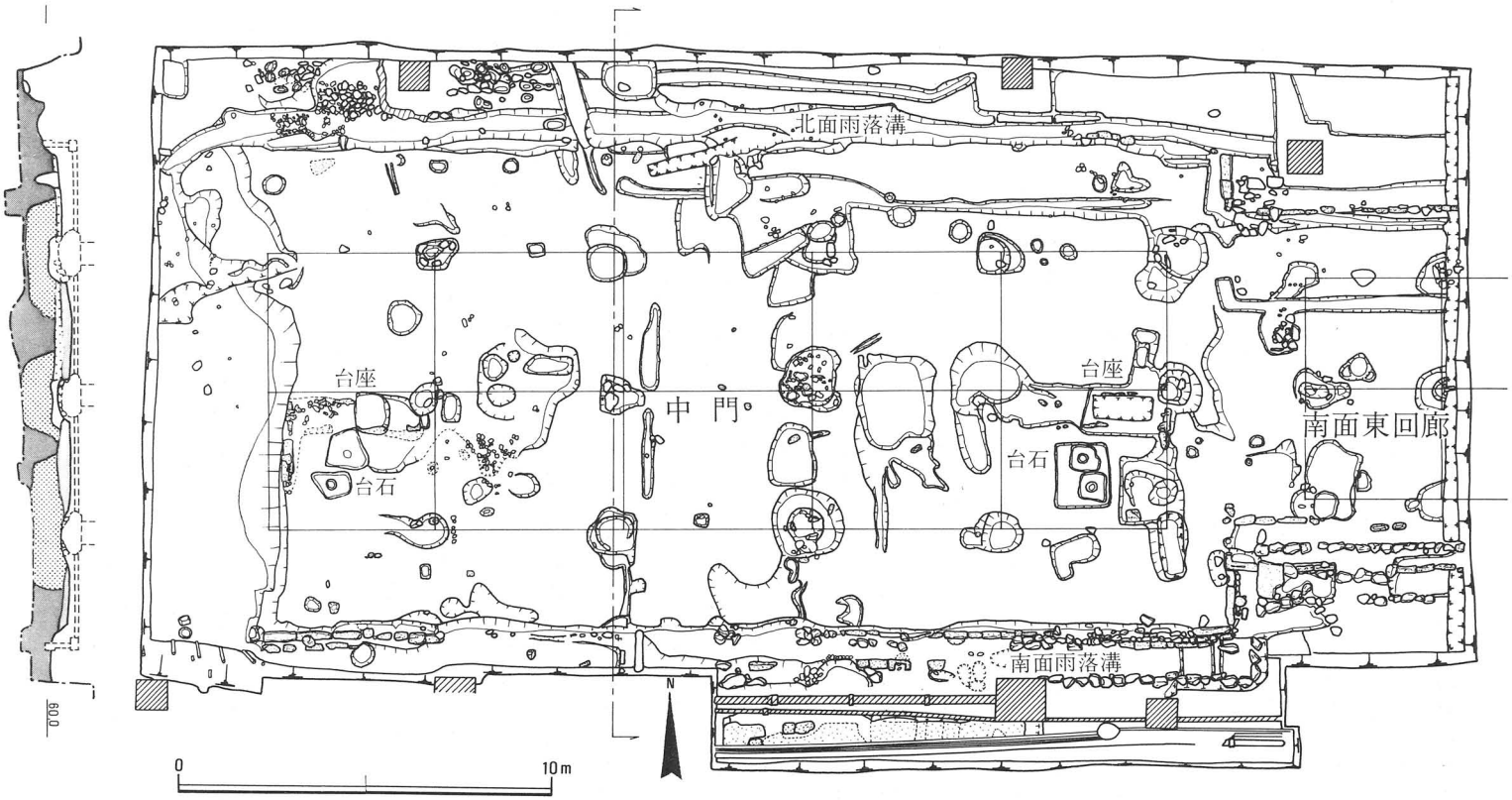
また、南面雨落溝の北約1mの位置にもう一条の溝を検出した。この溝は幅約50cm、北岸が直方体の凝灰岩列、南岸は玉石列で、時期的に最も新しいものである。1954年の調査では、この溝と回廊中軸との距離が12尺に相当することから、基壇幅24尺の単廊の存在の可能性を示唆している。しかし、これに伴う北側の雨落溝は検出していないし、単廊の存在を裏付ける礎石及びその抜取痕跡等も、今回の調査では確認し得なかった。しかも従来の各回廊におけるいづれの調査でも同様の溝は検出していない。また、この溝は複廊回廊の礎石にほぼ接しているため、最終期の回廊に伴う雨落溝と考えることも困難である。それ故、回廊の建物が失われ、基壇も破壊された後、土塁状に遺存した基壇痕跡の南面に敷設された排水溝と考えるのが妥当であろう。。

遺　　物

まず挙げられるのは、台石枘穴から出土した約200点の塑像断片である。しかし二王像の全体的な意匠及び形状を復原し得る量ではない。土器の大半は中門、回廊の南面から出土。ともに雨落溝下層の砂の堆積層からの出土が多く、土器の年代は10世紀後半が多い。雨落溝とその上層からは中世土師器、瓦器が多量に出土。この土器の時期差に天禄4（973）年の火災を比定することができる。



第44図　中門・回廊所用軒瓦



第45図　薬師寺中門・回廊発掘遺構図

また、複廊回廊の南側雨落溝の北1mに存在する東西の石溝からは、13～14世紀頃の瓦器片が出土し、この溝が最終期のものであることを示す資料を得た。

瓦塼類で計800～900袋出土し、軒瓦215個体、他に道具瓦、平安期鬼瓦、近世鬼瓦等を含む。なお中門基壇築成時の根がための瓦には圧倒的に本薬師寺式の軒瓦が多い。

まとめ

今回の調査は、南面東回廊の一部を含む中門の全域に及び、部分的な調査に終始した1954年の調査に比して得た成果も多い。建物基模、基壇規模及びその構造、そして基壇化粧の詳細はもとより、中門の内部意匠が明らかとなり、とりわけ『縁起』に記す計16躰の仏像の安置場所を推定し得た。しかも、このうち創建当初の二王像が塑像であったことをほぼ確定づけたことは、特筆に値するであろう。

また、回廊と中門とのとりつき状況についても明らかとなった点は多く、総じて復原のための貴重な成果を得たといえる。

このうち、特に考慮しなければならないのは、中門の構造上の問題である。先述の如く、中門の基壇の出は平方向が10尺で、妻方向が6尺、切妻造であることがわかる。しかも梁間1間分に対する平方向の基壇の出の比率が1.25とかなり大きく、従って平三斗組では軒を支えるうえで難点がある。むしろ出組の方が構造的に適しているといえる。しかし、奈良時代の切妻造の門遺構で出組構造を示すものには類例がない。東大寺転害門は現在出組の構造をもつが、天平時代には平三斗組であったことが、昭和修理の際に明らかとなった。他に5間×2間の切妻造であったことを想像させる奈良時代の門遺構として、大安寺中門が挙げられるが、梁間1間に対する平方向の基壇の出の比率が1.40であり、薬師寺中門における比率よりも更に大きな数値を示す。それ故、即断は避けなければならないが、このような規模をもつ奈良時代の門の中には、出組の構造をもつものも存在したことを暗に示しているともいえる。

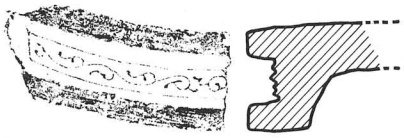
2　薬師寺旧境内の調査　第141 － 22次

本調査は、畑地造成にともなう事前調査である。調査地は薬師寺旧境内の東北部分にあたり、秋篠川の西岸20ｍの旧水田である。この地は従来の研究では薬師寺賤院推定地の南辺にかかり、平城京の条坊では六条々間の北側溝の推定地でもある。これらの遺構検出を目的に南北９ｍ、東西３ｍの発掘区を設定し発掘調査した。

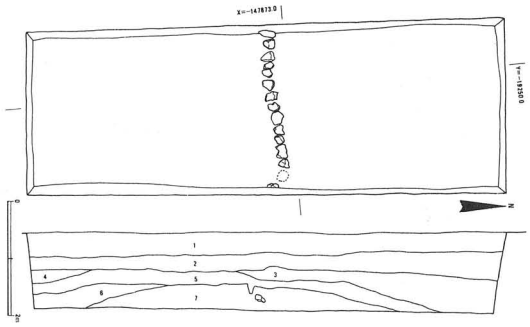
調査地の土層は上から、①水田耕土・床土、②暗灰粘質土、③青色粘質土、④青灰色砂質土、⑤青灰色粘質土、⑥暗青灰色粘質土、⑦暗灰色砂となる。③・④層以下南と北に傾斜する堆積を示す。②層からは近世の遺物が出土したが、③・④層は無遺物層であった。⑤・⑥層には中世の遺物が含まれ、⑦層からは鎌倉時代の軒瓦や瓦器が出土した。

検出遺構は石列１条である。この石列SX 01は７層中において検出したもので、東西方向にのび、両端は発掘区外にのびる。石列は挙大の野面石を並べたもので、直線はなさず、ゆるくＳ字状に屈曲する。発掘区の関係から、この石列の未端を追求することができず、従ってその性格は不詳である。その年代は、伴出遺物から鎌倉時代と見做せよう。

なお、石列の下層は、現地表下２ｍまで砂の堆積を確認したが、以下は調査不能であった。このため当初予想した薬師寺関係の遺構および条坊関係の遺構は解明するに至らなかった。



第47図　第７層出土軒平瓦

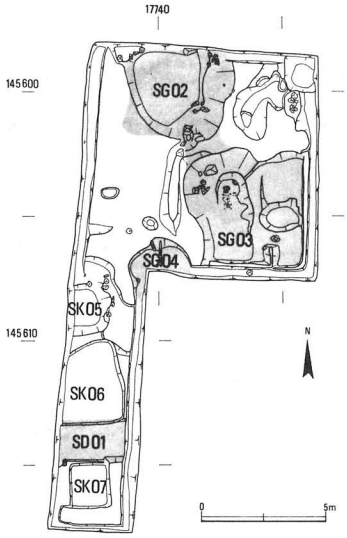


第46図　薬師寺旧境内発掘遺構図

3　法華寺旧境内の調査(1)　第141－1次

本調査は宅地造成に伴う事前調査。当該地は左京二条二坊九・十坪々境にあたり、昭和55年の第123－4次調査で当該地の西隣を発掘して、法華寺と阿弥陀浄土院を画する塀および溝を検出した。

発掘区の層位は、耕土、床土、中世土器および木炭を多量に含む灰褐色砂質土、灰色・黒色粘質土、および地山の灰白色粘土層と移行する。奈良時代の遺構面は灰色・黒色粘質土層である。検出遺構は、園地1、井戸状土壙3、溝1がある。東西溝SD 01は幅約2ｍ、深さ0.2～0.5ｍの素掘で、第123－4次で検出した法華寺と阿弥陀浄土院を画する溝に連なる。SG 02～04は平面不整円形の園地。深さ0.7ｍで、護岸には径0.5ｍ以下の河原石を用いるが、大半は失われていた。この園地は変形しながら中世まで存続したようで、SG 04西側に中世の護岸石が一部残っていた。土壙SK 05～07は一辺が2～3ｍの隅丸方形の土壙で、深さは1ｍ前後ある。SK 06、07はSD 01の溝肩を切っている。出土遺物には、多量の瓦、土器、木器がある。瓦は奈良時代から中世にわたり、軒丸瓦15、軒平瓦19がある。うち、平城宮軒瓦編年Ⅱ期の軒瓦が4割を占める。他に二彩、三彩丸瓦各2、緑釉水波文塼1、箆描塼1点がある。土器は土師器64点、須恵器78点、その他28点がある。木器は花文を墨書した有孔円板1、「采女」と記す習書木簡1、折敷底板1、加工棒・加工板26がある。折敷はSG 02から、他はSD 01出土。



第48図　法華寺旧境内発掘遺構図

今回の調査では、第123－4次調査で検出した法華寺と阿弥陀浄土院を画す溝を検出したが、前回と異なり溝に伴う塀は検出できなかった。しかし溝に近接して園池が営まれており、それが中世まで存続したことが注目できる。下限の年代は鎌倉時代中期の叡尊等による法華寺復興期と一致し、その復興状況の一端を窺うことができる。

4　法華寺旧境内の調査(2)

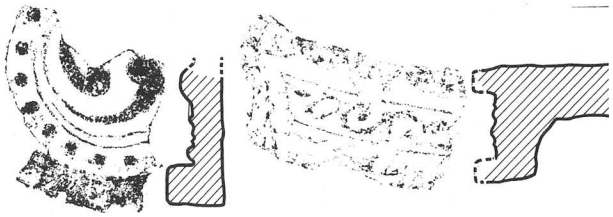
この調査は法華寺地蔵堂建設にともなう事前調査である。調査地は、数年前、法華寺境内に移された横笛堂の跡地である。この地は法華寺東面回廊の外側の位置に想定される。

調査地の土層は地表下30～40㎝がバラス混りの硬い土で全面をおおわれており、寛永通宝などを含んでいた。その下はバラス混り黄褐粘土（厚さ10㎝）があり、その上に据えた大小の石からなる根石状の石組（径0.6～0.7ｍ）があらわれた。建物の根石であることも考え、発掘区を四方に拡張して調査を続けたが、少なくとも石組から３ｍ以内には対をなす石組みは存在せず、根石の可能性は薄らいだ。バラス混り黄褐粘土の下は暗褐土（厚さ50㎝）で、瓦・土器など中世遺物を含み、その下は黄褐粘土の地山となっている。

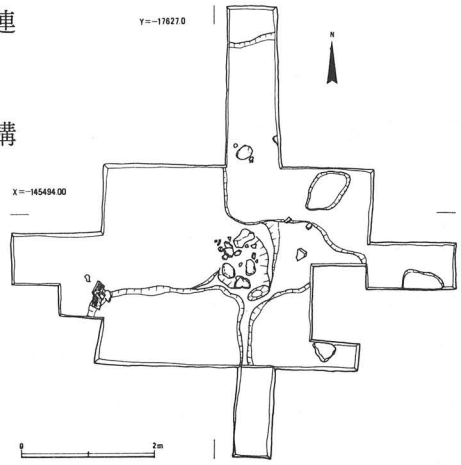
以上のように石組みの性格ははっきりしない。ただ土層・遺物からみて、石組みの設けられた年代は近世初頭を遡るものではない。

ところでこの石組みは移転前の横笛堂のほぼ中央部にあたる。横笛堂の建築は元禄年間頃の創建とみられているから、年代的には石組みとの関連を考えさせる。しかし、横笛堂は床張りの建物であり、また本尊の横笛地蔵も床の上に安置されており、石組みを、仏像の台座の基礎施設と考えることも出来難い。このような点からみて、石組みは、直接、横笛堂との関連をもたないものと思われる。

なお、調査地における奈良・平安時代の遺構については手懸かりを得られなかった。



第50図　横笛堂跡地軒瓦

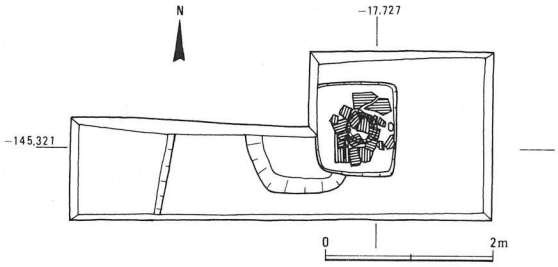


第49図　横笛堂跡地発掘遺構図

5　法華寺旧境内の調査(3)　第141－3次

奈良市法華寺町870番地の塚本宗敬氏所有地における住宅建設の事前調査である。当該地は法華寺旧境内の西北部に位置する。現況は庭木の仮植地になっており、調査は西方の隣家に接する南北5ｍ、東西1～2ｍ、約7㎡の小範囲に限られることになった。

調査区の土層は、上部0.5ｍが宅地のための整地土。その下部0.5ｍが古代―中・近世の瓦を含む遺物包含層であり、地表下1ｍで灰白色粘土の地山面に達する。地山面で、方1ｍの柱穴1と井戸1を検出した。柱穴は、底面に瓦片を敷き、中央部に径37㎝の柱痕跡を残す。瓦から奈良時代に属するものと考えられる。この地区に大規模な掘立柱建物のあることが明らかになった。調査区北端で検出した井戸は、下層の遺物包含層から出土した瓦片から中世以降のものと判断される。井戸枠等の施設は全く遺存しなかった。



第51図　法華寺旧境内発掘遺構図

6　法華寺旧境内の調査(4)　第141－6次

店舗付住宅新築に伴う事前調査として実施したもので、調査地は法華寺旧境内の東端にあたり、東二坊大路西側溝の検出が期された。発掘区の中央から東にかけて大きな掘込みがあり、南北溝の西半部と思われたが、内部の堆積土に含まれていたのはすべて中・近世の遺物であった。出土遺物としては、軒丸瓦6320 A型式1点、軒平瓦中世1点・近世1点、中・近世の土器類数十点がある。

7　東大寺旧境内の調査　第141－32次

本調査は社員住宅の建設に伴う事前調査。当該地は史跡東大寺旧境内にあり、転害門の北、西面大垣の推定地にあたる。

この地は、春日山山麓から西に緩やかに延びる丘陵上にある。調査地の旧地形の東端と西端の比高差は0.6ｍにも及ぶ。このため、古代から今日迄幾層に及ぶ整地が繰り返し行われ、調査地西端ではそれが1ｍにも及ぶ。遺構は出土遺物とこれら整地層との重複関係から、おおきく古代、中世、近世、近現代に区分できる。

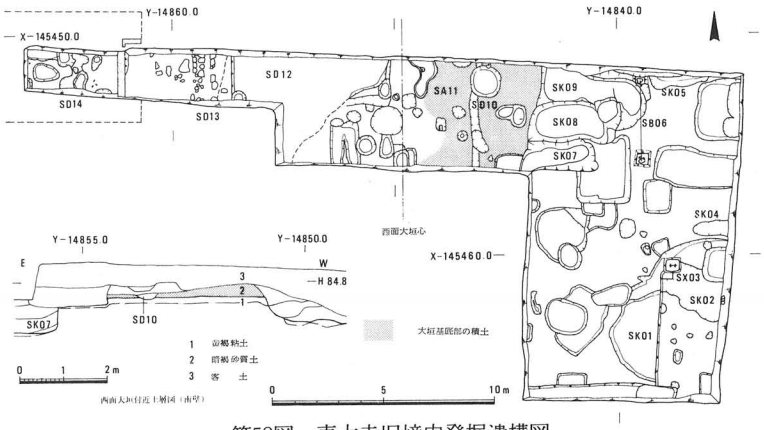
検出遺構は、東大寺造営前の旧河道、東大寺西面大垣基底部、同東雨落溝、玉石組水路（近世）、土壙群、建物、泉水など多種におよぶ。ここでは奈良時代の遺構に限定して説明しよう。

SD 12　発掘区内を東北から西南にかけて斜行する幅約7ｍの旧河道。埋没直前には幅が4ｍに縮少し、深さも0.3ｍとなっていた。

SA 11　東大寺西面大垣の基底部。黄褐色粘土の地山面を削り出し、その上に暗褐色砂質土を積み固める。暗褐色砂質土は最大厚0.3ｍであるが、東西幅は両側が撹乱され明らかでない。

SD 10　西面大垣東側溝、幅約0.35、深さ0.05ｍ程度が残る。この溝は、大垣築土の暗褐色砂質土を切りこむ。その位置は転害門棟通りから約3.2ｍ東にあたる。

なお大垣から西の発掘区では近世の撹乱によって顕著な遺構は検出できなかった。



第52図　東大寺旧境内発掘遺構図